

参加者一覧 02
連作欄 8首の連作 自由詠 03
テーマ詠欄 「夜」 14
一首評 「そらよみ」 18
クロスワード 19
短歌リレーコラム 「望遠鏡」 20
リレーエッセイ 「いちごいちえ」 22
次回予告・編集後記 23

うた
そら

2024.
September

no.

22
ら

うたそら 第22号

発行：2024.09.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

ご感想は
こちらまで！
Twitter(現X)
ハッシュタグ

#うたそら

「うたそら」では Twitter(現X) での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

第23号

連作欄 8首の連作 自由詠
テーマ詠欄 「昼」
一首評 「そらよみ」
短歌リレーコラム 「望遠鏡」
リレーエッセイ 「いちごいちえ」



短歌募集



第23号 '24 10/31(木) 24時

• 8首の連作 自由詠 • テーマ詠「昼」1首

第24号 '24 12/31(火) 24時

• 8首の連作 自由詠 • テーマ詠「朝」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

地震や台風など、心配事の多い今日ごろですが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。わたしは防災バッグを作り直したり、部屋の配置換えをしたり、少しでも防災への備えに気を配ったりしていました。新学期も始まり、少しずつ夏も終わりに向かっていくようです。誰にとっても平穏で楽しい毎日でありますように。

今号もたくさんのお作品をお寄せいただきました。クロスワードもご用意しています。短歌作品とあわせて楽しんでいただければ幸いです。

次号は11月発行、テーマ詠のお題は「昼」です。深まる秋にすてきな作品をお待ちしております。

編集員 千原こはぎ

今号のうたそら 第22号

- 参加歌人様 63名
- 連作欄 43名
- テーマ詠欄 52名
- 一首評 5名

コラム 斎藤君 さん
エッセイ 久永草太 さん

ご寄稿いただき
ありがとうございます
ございました！



illustration: kohagi chihara

碧乃そら @hane_a022
青野佑季 @book_aoinusyoku
麻数 @umberhemp
麻倉ゆえ @AsakuraYue
有村栞 @chattenoire_k
井倉りつ @ura_litz
石川順一 @Hitler57
宇井モナシ @kijousan
宇祖田都子 @Shinmyutu2020
泳二 @Ejshimada
hs @hswelt

香子 @kyoko_shogi
久野和声 @wasei9th
久保田毒虫 @dokumuu44
くろたか湖春 @koharu_kura
くろだたけし @kuro2016
桜こころ @wJ59f8NwfuJlq3
澤田悠生 @ranka_yuuki
じえろーと @xi_zhen_lwJT
西鎮 @yohana_no_sekai
白石夜花 @XHksbNR4wv1wJ8M
寿司村マイク @XHksbNR4wv1wJ8M

夏生薫 @kaorunatsuo
夏野ネコ @natsuneko2000
袴田朱夏 @hakamada_shuka
薄荷。 @ajie0himeco
笛地静恵 @Ymcx6rhzyfEZ9wq
福山桃歌 @momoka_fukuyama
古井 朔 @saku_furui
真岡まな @mao_or_mana
まよけ @mkskpompomfuwa23
御糸なち @MEATsachi

村田一広 @mucc12022
森内詩紋 @Nuq40cFv95gicRpu
杜崎アオ @morisaki_ao
箭田儀一 @Ychukai032142
ヨシタジヤック @jacksbeans2
れいあむ @Re14m_bot

計63名

たくさんのお参加
ありがとうございます！



歌島孟 @simn1990
がね @gamicus08
瀬井井戸 @kareido1111
河岸景都 @kate_kawagishi
かわはらう @suiikanikan_kawa
北谷雪 @kitaya_nisomisio
砧 @kmnr_r09
君村類 @kyoko_shogi

千原こはぎ @kohagi_tw
辻堂 瞬 @croissant_hey_z
ともえ夕夏 @nakam8
中村成志 @kaorunatsuo
夏生薫 @natsuneko2000
袴田朱夏 @hakamada_shuka
薄荷。 @ajie0himeco
笛地静恵 @Ymcx6rhzyfEZ9wq
福山桃歌 @momoka_fukuyama
古井 朔 @saku_furui
真岡まな @mao_or_mana
まよけ @mkskpompomfuwa23
御糸なち @MEATsachi

深影コトハ @cotoha_nikage
南の島 @_nikmm
衣未(みみ) @mimi_4567
水也 @m_ya-o
宮岡りょう @myao_rrr
虫武(は) @mushitake
六浦筆の助 @Tohakumutun5057
六厥めれつ @meruummai
村田一広 @mucc12022
森内詩紋 @Nuq40cFv95gicRpu
杜崎アオ @morisaki_ao
箭田儀一 @Ychukai032142
ヨシタジヤック @jacksbeans2
れいあむ @Re14m_bot

重力下上目遣いで落ちてくるプリンの飛沫を浴びるサークル覗き穴 鍵のかかったウエイティングサークルに逆さのつむじ風無記名の隠し扉に声もなくいつまでも逆さの落とし物重なった同じ世界に声もなく蜃気楼吐く冷たいところ二次元のカラスアゲハは重なった軌道を滑る頭を垂れて頭から針を抜き去り性欲はコンクリートへ拡がる汚水真夜中の渴き性欲アリジゴク触れられぬ指先のオアシス満月のすべり台から深海へ救えなかつた兎の不在

夏の終わり

泳二

がね

一番の夏の終わりを持って来て飛行機雲を見てるから来てこんなにも近くに雨雲が来てる眼鏡を外さずに汗をふくソーダバーなかつたんだよスイカバー半分こしよ先に食べなよコンビニで買ったビールで確かめる去年の夏と同じやり方夕立のあとの空気をかき分けてまた遠回りする帰り道夕涼みしながら食べるたこ焼きとかき氷 遠くの花火 灯籠は少し笑って流れゆく空と交わる海を目指して土砂降りも宿題もセミも亡霊も夏のうれしい思い出の勝ち

時をかけてゆくワタシ

数かぎりない失敗をくり返し、ようやくめぐり会えた気がするふるまいは時代錯誤に着飾って、僕は異様に見えたでしょうかあなたへと近づきたくて歴史書を讀んでみる、不死を演じてまだ君と過去の御触れは生きていて、兵士は門を閉ざし続ける窓からの光のなかで虹彩は宝石みたく輝いていた真砂なす君の千歳があじけないものであるなら、花となりたい限りある命で時をつまみ食いしたら、いつかは飽きるでしょうか？普通とは異なる身体とこしへに老いぬ我が身がうらめしい人

グリーンブーツ

がね

精液のあぶくよ海よ生まれては死ぬ者たちが宿す永遠立ち昇る火はふるさとへ行くのだろう 血はそれから山に滴る地下鉄の一番深いところまで 暗闇が虚空へ変わるまでエベレストのグリーンブーツの埋もれた死者と生者が交わるころ雨粒の破片に 写る 自分が 砕けるまでに捧げる祈り 僕も白あなたも白で溢れ出す名前ただただ見渡している 宇宙卵 破れるまでの静寂がずっと世界の裏側にある どこまでも見通している鴉の眼 ボタン一つで出来る戦争

ちよつとしか関わってないんで。あ、でもなんて言うか、等価交換の原則っていうのかな。一度則宝会のおじさんに姿の映るものを綺麗にする理由を尋ねたんですよ。そしたらその人は「苦しんだのと同じだけ幸せになるため」って言うてました。答えになつてませんよね。だからもうそれ以上訊きませんでしたけど、そんな感じの教義なんじゃないのかなあ。

え？鏡ですか？まあ、はい、ありましたよ。物置の一番奥に。あ、奥って言うっても北の隅です。物置は家具とか服とかで溢れかえってるんで、ちよつとした迷路みたいになってるんですけど、その一番奥に三面鏡が置いてあります。母がこの家に嫁いでくる時に一緒に持ってきたやつみたいですよ。おかしなこと？さあ……三面鏡が開いてたことぐらいですかねえ。普段母は洗面所で化粧するんですけど、年に何回かは思い出したようにその三面鏡の前で化粧するんですよ。だからその日はそこで化粧しようとしたのかなあ。あ、でもあれはおかしかったかもしれない。昼ご飯を運んで来てくれた時、なんかじつと僕の顔を見つめてくるんですよ。何？って訊いたら「そろそろ負債返さなきゃねえ」って言うたんですよ。意味わかんないですよ。

ああ、おかしいと言えばですね、母が失踪してからいくつかわななことが起こったんですよ。まず、僕の体調が良くなったこと。僕ね、再生不良性貧血って言って、血液の難病持ってたんですよ。発症したのは三年前です。骨髄のドナー

がないとダメってくらい重かつたんですけど、なかなか見つからなくて。週に何回も点滴とか輸血しに病院行ってたんですけど、母が失踪してからすつかり体調が良くなつたんですよ。勿論手術も何もしていません。不思議ですよ。あとは家中の母の写真が全部失くなりました。スマホの画像も全てです。後ろ姿のはあるけど、顔が写っているものは全部ダメ。きつちり母の顔が写っているものだけ失くなってるんですよ。何故なのかわかりません。何かオバケみたいなやつが母の痕跡を消そうとしているような気がして少し怖いです。

はい？母の障害についてですか？はい、あれは生まれつきではありません。左足はいつからか教えてくれませんでしたけど、生来のものではないらしいです。左目と左手に関しては、何て言うかなあ……。実は僕一回死にかけてるんですよ。難病じゃなくて事故で。五年前、父の運転する車で事故にあつて、二日くらい意識なかつたんですよ。で、僕の意識が戻つたら母の体はそうなつてました。それまでは左足以外健康そのものだったのに。髪も黒かつたのに全部白髪になつてました。何の病気かは教えてくれませんでしたけど、不幸って重なるんですよ。あ、あとその事故で父も死にました。はい、父は即死だったみたいです。

え？物置と隣の倉をですか？はい、かまいませんけど。倉を出るときは鍵を締めてください。はい。鍵は……ああ、あつた、これです。

「高村咲恵氏の失踪に係る報告書」

令和6年8月30日午前、高村咲恵氏の長男、健一氏（満14歳）への聞き取り調査を実施。本件事案は、則宝会の鏡信仰に深い関わりがあると思われる。（中略）

同敷地内の倉の長持の中にたとう紙に包まれた写真を発見する。一人の女性が暗い部屋（恐らく写真の保管されていた倉かと思われる）にて臍の緒のついた乳幼児を頭上に高く掲げているものである。女性の周りには12本の蠟燭が灯され、女性は開いた三面鏡の前に全裸で正座している。女性の顔は黒髪で隠れているものの、咲恵氏と推測できる。乳幼児は啼泣しておらず、顔は青ざめている。（写1参照）（中略）

以上から、健一氏は出産直後には死亡していたが、何らかの方法を用いて蘇生されたものと推測できる。（中略）

自宅物置内の三面鏡については、下部の引き出しに古い護符が一枚入っていたものの（神社名は劣化により判別不能）、特筆すべき異常は発見できなかった。（中略）

以上から、本件事案を継続調査対象とすると共に、則宝会を要監視団体に格上げする事を提言する。

第二公安捜査第八係 八島祥子

短歌リレーコラム

望遠鏡

22

短歌にまつわるあれこれについて

自由きままに書くページ

今号のテーマと書き手さんは…



書き手

齋藤君

テーマ

献身

行方不明者に関する情報提供のお願い

名前 高村咲恵

年齢 48歳(昭和51年9月20日生)

身長 158cm

体型 中肉(54kg前後)

服装 水色チェック柄ブラウス 黒のジーンズ

髪型 ショートカット 白髪

特徴 左目が白濁している 左手の薬指、小指

が動かない 左足を引き摺って歩く

心当たりの方は、下記警察署又は最寄りの警察署、交番までご連絡ください。

埼玉県〇〇警察署生活安全課

電話0421〇〇〇1××××

秋の声ひたひたと来て吾子のまた三面鏡の奥に泣きおり

この歌は母が失踪する前に短歌会に提出していた歌のようです。だから二年前の作品ですね。他にも何句か、あれ？短歌は首でしたっけ？まあいいや、何個かあったんですけど、この歌に固執する人が結構いて。まあ主に則宝会の人達ですけれどね。何を表現しているのか僕にはさっぱりなんですけど、見る人が見ると何かわかるらしくて。ああ、お姉さんもそうなんですか。やっぱり何かあるんだこの歌には。でもお姉さんはあれですよ、母のいた則宝会の人じゃないですよ。はあ、そうですか、記者さんですか。つまり警察の人かと思いました。

ええ、そうです。母が失踪した日は、まさにその短歌会がある日でした。その頃僕はずっと体調が悪くて学校にも行けず、自分の部屋で横になってばかりだったんですけど、屋頃に母が隣の部屋に入っていく足音を聴いたんです。はい、あれは母だったと思います。父は五年前に他界しましたし、祖父は畑に行っている時間でしたから。確か午後一時半頃だったと思います。隣の部屋は物置になっていて、短歌会が二時とかだったから、急がないと間に合わないよって注意しに行こうと思ったんです。その直前に昼ご飯を運んでくれた時にはノーマイクだったので。重い体をなんとか起こして隣の部屋の引き戸を開けると、そこにもう母はいなくなりました。それっきりです。それから何の音沙汰もなし。

近所の人にも知り合いにも訊いてみましたが、何の手がかりもありません。警察にも行ってみましたけど、結果はお姉さんもご存じの通りです。

母は左足が不自由でしたから、家出しようにも短時間でそんなに遠くに行けないはずなんです。家出する理由もないし。母がいなくなると30分くらいで僕もなんかおかしいな、と思つて畑に祖父を呼びに行つて一緒に車で探したんですけど、どこにもいませんでした。じゃあ誘拐かつていうと、さっきまで家の中にいたんだからそれもなんか不自然ですよ。身代金の要求もなかったし。理解できないことばかりです。

則宝会ですか。ああ、あれはなんていうか、宗教？そこまではいかなのかな、まあそんな感じのやつです。母は群馬の山間の出身なんですけど、そこに根付いている組合内の結束を図るための組織で、色んなイベント？とか奉仕作業とかをしてたみたいですね。特に清掃活動には力を入れてたみたいです。公園や田圃のゴミ拾いとか、どぶさらいとか。中でも公共物で姿が映るものは特に気を遣って磨いていたみたいです。公園のトイレの鏡とか、公民館のガラスとか、まあそういうやつなんでしょうけど。なぜか幼い頃から鏡は綺麗にしなさいって母にも口うるさく言われてましたね。毎年お盆は母の実家に泊まりに行つてたんですけど、その時には必ず則宝会の人達と清掃をさせられてました。教義？いやあさすがにそれはわからないですね。

松本城

炎天下松本城の黒壁を眩しく眺めるボヘミアン達

モヒカンのピンクの人が城下町俳句仲間を率いて闘歩

銃砲を売りにしている古城の天守閣では風が涼しい

散歩後に城の近くで句会をし大雨のため慌てて帰る

悪天で電車が停車洗馬駅で日が沈みすつと夜になる

三時間近く遅れて終電に間に合うものの終バスは無し

とぼとぼと家路をたどる一日で詠んだ句は二百三十句

五分間自由プレゼン訓練校最後の課題、題は「吟行」

涸れ井戸

祭りの夜

かわはら

この町の隅から隅に至るまで日がな響く祭りの太鼓

噴き出したラムネばたばた地面に落ちアリがわらわら集まってくる

Switchは当たりっこないと知りながら引いたくじで当たる水鉄砲

1口目の最大瞬間風速を超えることなくかき氷溶ける

弟がすくった金魚 弟が家出た今も優雅に泳ぐ

じゃがいもをトルネードにして揚げただけなのは知りつつ惹かれてしまう

妹とノリでつけた光る腕輪 仏壇の前でまだ光ってる

晩飯を出店で済ませようとしたけど微妙に高くて結局サイズ

遠い世界に

河岸景都

Paris2024

北谷雪

指先が遠い世界に触れている 紙をめくれば終わる革命

誰にでもなれると思ひ込みたくて一人称を追いかけてゆく

水面を撫でた手のひら差し出せば海は優しく見えると聞いた

顔を上げ生活にもう戻ろうか晴れの言葉を一つ増やして

新しい服を下ろした朝みたい表紙を閉じて始まるおはなし

知らないと知っているのは美しい いたる所に辞書は置かれる

無風では何も飛ばない乱すため知らない空を選んでいたい

魂がインクに宿る瞬間を今日も見ている 世界は進む

熱狂のうねりを鎮め巴里の灯に大河のような歌声が降る

素麺が吹き溢れたとき十四の少女は選手寿命のはなしを

泣いたつて良いのになんて二三然してどうしたのわたしの兄さん

息を呑む躍動(二秒の5255B) 水へと還る筋肉

片翼を光らせ腕を振り上げたバレー選手のように遂げたい

無愛想な君に右手を空けておくノールックパス待つよへいへい

スーパリーの袋を持てば昨晩の小さなガッツポーズの高さだ

来世ではSnigekixから生えたいと拗ねる手足を宥めつつ寝る

おわりに

君村類

晩夏の悲しみたち

久保田毒虫

枯れていく季節の花を抱きしめて幼い少女の自分を殺す

雨の音が響いてばかりいる部屋の暗がりにも触れる影の素直さ

ばらばらとめくる手帳の空白を愛せるようになってしまった

この手からすり抜けたものだけがきれい コーヒーフィルターのかすを捨てている

猛暑日の予報がとる毎日の風に囁く懺悔の匂い

ポストには残暑見舞いが投げこまればかきかたも塞がればわからない

紫陽花は色を変える花 比較的まっとうな社会人をやれている

ばつさりと髪を切ること忘れることなにもなかった顔で生きること

タイランド

香子

長い遊び

くろだたけし

機内にて懐メロチャンネルの曲を見て 自分の年齢を再確認する

マイケルとマドンナ、プリンス、粋な選 でも小室哲哉は懐メロちやうで

ラン島の澄んだビーチでふかふかと浮かば悩みも少しは軽く

おじさん達ビーチロードで野外チェス 将棋だったら参加するのに

「中国の将棋は『象棋』って呼ぶのよね」象の国にてふと思いつく

大切な人へ届けと残暑見舞い POST OFFICE に絵はがき持ち込む

帰宅してスーツケースを開ける瞬間 異国の空気ふわりと広がる

ソムタムを気に入った夫に作るべく探すよレシピ 旅の余韻

渡れない川じゃないのにそれぞれの岸から石を投げつけあった

踏みつける大きな足があるなんて踏みつけられてはじめて知った

撃つ人がいれば撃たれる人もいて選ばれましたと通知が届く

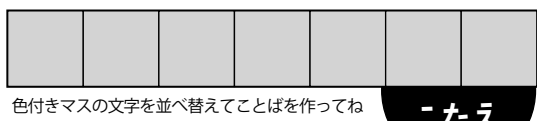
ほんとうに社長を目指す人もいて資本主義っていつまで続く

待っているだけでも年は取るけれど怖がりだから隠れてしまふ

探してもゴールはなくて落とし穴に落ちたところで終わりのゲーム

子どもらの長い遊びを見るように神さまは戦争を見るのか

審判に渡した金が足りなくて負けても金は返ってこない

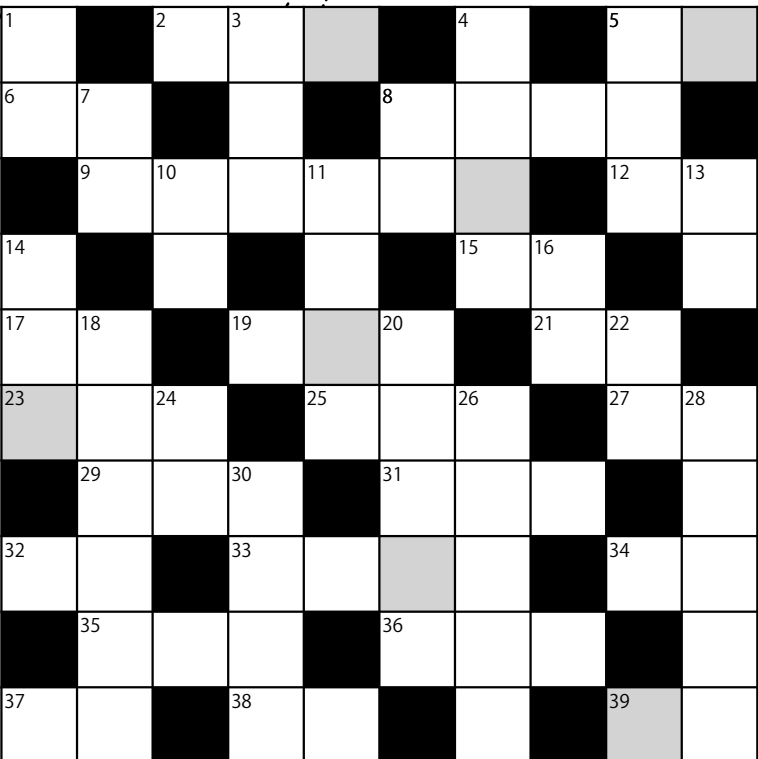


ことえ

ヨコのかぎ

- 2 人に勝とうとする気性
- 5 物のとがって突き出した部分
- 6 蜂○○のうごきの鈍ささへ冬のよるこびとして眺めてをりぬ / 笹井宏之
- 8 買うのではなく借りること
- 9 世界一の記録を集めた本
- 12 実際以上に美しく表現すること
- 15 黒くてとげとげの海の生き物
- 17 作業工具、防具、ヘアアイロンの一種
- 19 畳を敷いた部屋
- 21 パイプ、チューブ
- 23 建築業界では詰め物のこと。小豆などを甘く煮詰めて練ったもの。
- 25 前もって必要なものをそろえ、整えておくこと
- 27 レジスターの略
- 29 寝るときに着る衣服
- 31 明治屋に初めて二人で行きし日の苺の○○の一瓶終わる / 俵万智
- 32 ○○も実力のうち
- 33 価値のある情報。またそれを聞くこと。
- 34 さらさらさらさらさらさらさらさらさらさらさら○が粉ミルクになってゆく / 穂村弘
- 35 「守る、防ぐ、警備」を表す英語
- 36 陸地を掘って船が通れるようにした水路
- 37 今日の次の日
- 38 ニホン○○、シマ○○、ふさふさした尾の小動物
- 39 人体の全体をコントロールしている重要な臓器

クロスワード



タテのかぎ

- 1 わが胸にぶつかりざまにJeとないた ○○はだれかのたましいから / 杉崎恒夫
- 3 将棋に似た西洋のゲーム
- 4 空気などの気体が希薄な空間
- 5 牛・豚のばら肉
- 7 三人字を○○から○○へ湯に入れて白鳥の倚るごとく疲る / 岡井隆
- 8 順に長く並んだもの。並び。
- 10 改札まで繋がっていた手の○○を夜空で冷ますように振り合う / toron*
- 11 文字で書き記したもの。書類。
- 13 腕のつけ根の上部

- 14 不器用に季節は過ぎて朝焼けにはじまるきみの○○週間 / 山田航
- 16 ○○を切らせて骨を断つ
- 18 自然に地中から沸き出るガス
- 20 普段。普通。いつも通り。
- 22 ○○が見てもわれをなつかしくするとき長き手紙を書きたき夕 / 穂村弘
- 24 回転させて遊ぶ伝統的な玩具
- 26 穴を開けない耳飾り
- 28 賞を受けること
- 30 黄色がかった緑色



一首評 そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

ポップコーンしゃもしゃも崩しながら観たつ
まらない映画できみが泣いてた
君村類

連作『ばけもの』には、助詞ひとつ異なるだけのほとんどの歌がふたつ組まれている。この歌は六首目で、一首目では結句が「きみは泣いてた」である。〈は〉も〈が〉も主格を表す助詞という点では同じだが、その使い分けによって、連作の中で「きみ」に対する主体のフォーカスがクリアになっていくのが伝わる。主体の抱く社会への関心や、開かれていく視界を感じさせ、とても巧みな一首（あるいは二首）と思う。

一首評

北谷雪

あの雲の高さから落ちたにしてはやさしい
雨だ さよなら、ディラン
袴田朱夏

ポプ・ディランのことか。彼で「雨」といえば名曲『激しい雨に降られて』を思い出す。「さよなら」とは、ノベル賞を受賞するほどの存在になった彼への惜別だろうか。「そんな高みから降らせてるのに、あの頃の激しさはもう無いじゃないですか」といういや、歌の肌触りから感じるのはそんな表層的な皮肉ではなく、もつと内面から発される切実な何かだ。句跨がり、一字空けと読点が、心情の揺れと呼吸を伝えている。

一首評

中村成志

そんなのが許されるならなんだってできる
気がした イエイ オニスズメ
深山睦美

連作の一首目。なんだって勢いがある。すぐに次の歌を読みたくなる。なんだってイエイ オニスズメだから。連作を通じて悲壮感が無い。心地よい。ドライである。湿っぽい抒情歌なんて用はない。用なんでも。歌のなかに放り込めばほら元気がでる。食事のときも。寝るときも。元気が。なんだってできる気がする。途中駅でも。生きるべきでも。気がする。イエイ オニスズメだから。

一首評

ヨシダジャック

きみはいい子になった褒美としてきみになったのか おとうとの椅子
ヨシダジャック

様々な読みが許容される歌と読んだ。破調だが、何度も声に出して読みたくなる韻律の良さには、トータル31音であること、そして結句の収まりの良さが効いているのだと思う。〈きみ〉は、結句の〈おとうと〉にも〈椅子〉にも読める。直接的にはそれに言及することなく、今は喪われてしまった幼少期もしくは少年期の弟の面影、もしかしたら弟の生命そのものに対し、椅子を前に思いを馳せている景が浮かんだ。

一首評

西鎮

空欄を埋めよと命じる問四を入道雲でいっぱいにする
宇井モナミ

テーマ詠「雲」からの一首。問題の答えが思い付かず真っ白である事と、思考が纏まらないという事を、モクモクと白が広がりが続ける雲の特性を使ってユーモラスに表現している。また空欄を窓に見立てて無限の空に現実逃避出来るのも面白い。結局、現実では空欄が白い事には変わりはないが、上の句の問題文から受けた威圧感と、答えが分からない不安感に対する精一杯の抵抗が感じられる。

一首評

澤田悠生

五十周年の夏

恒例のロックバンドの夏イベにとどろくデビュー五十周年
二万人Kアリーナにあつまりてふたたびのない夏祭りする
「全身を鼓膜に」されるカフカのハイスベックな音を浴びつつ
いくつものシングル曲を歌いたりその半世紀束ねるように
遠い野の熱狂だった伝説のオールナイトも十万人も
新婚の友は夫を伴いてまんまとファンに引きこみており
願うのは終わりになき旅 解散も引退もなきうつつの声と
動線にあふれる帰路の人群とみなとみらいの夜景をわたる

桜さくら

地上

アーモンドの花の匂いだ、八月の坂道に立つ女のひとから
もう汗か涙かわからなくなったなにか拭って作業着の袖
空蟬の背中まっすぐ裂けていてあなたはあなたのまま、真夏の
人ならば膝だと思う、東へと流れをかえて深くなる河
ミシシippアカミミガメを爬虫類代表としてすりこまれたつけ
夏疾風 あなたを連れ出す口実は結局思いつかなかったな
人間が地上に引いた線だから越えられるって鳥たちはいう
スターマイン 友だち以上の帰路にする覚悟はいいか、俺はできて

西鎮

旅先にて

滑走路 車輪の跡は続きおり平熱のまま絶望のまま
台北の運転手たちの頼もしさスマホ両手のハンドル操作
濁流の寧夏夜市掻き分けて鱗を散らす我は鯉なり
揚げパンの油が粥に浮いていて水平線には月が浮いてた
霧雨の瑞芳駅の静けさよ線路の先は書かないでおく
言葉って難しいよね屋上の積乱雲が形を変える
士林のカムパネルラに物申す 愛する人は自分で守れ
僕たちはピクトグラムに導かれ知らない街の夜景を観てた

澤田悠生

夏の海

ひとすじにサーファーは立ち海上を近づいてくる膝のまっすぐ
シュツとしてボードを抱いた沖からの使者は中村竜似のおじさん
あしくびを水に浸せば思わずに強く浚った砂の流れよ
あうらとの読みかた知らないころ読んだ林あまりの足裏の恋歌
伝説のBEACHの地図は渡されず今日の予報は36℃
缶ビール買ってこなくて取りあえずご覧あれが医科大病院
ポケットの本を両手で見開けば水平線と平行になる
でかい声出せて面白かったかな 制服で濡れる高校生たち

寿司村マイク

智花でも鈴木さんでもなくなつて飲みに行きたしちよつと底まで
 なに飲んでゐるの となりに来たたひとはバナラローズの香りをまどふ
 昼も夜もないバーカウンターはいい 互ひに名前も知らないままで
 店で会つた男との顛末を聞く心の中でサキユバスと呼ぶ
 一人遊び続けるやうにサキユバスはチワワのことなど話して笑ふ
 そしてふと粗末にしてゐる気がすると彼女は云つた自分のことを
 よく来るの？いいえ時たま ああさうださよならをしないままで別れた
 また粗末にしてゐるだらうか夏の底の魔物のことを考えてゐる

S (UNAYAMA) F 八首選 表裏無限体

砂山かうり

秋空よ澄めよわたしも最果ての見知らぬ人の最果てになる
 墨を磨る紫式部の硯には超新星の光も混じり
 屋上に海あるといふ階段の吹き抜けをゆく番のこどり
 妹も吾もいつまでも子のままに銀の夕ぐれ金の夕ぐれ
 遠くからミラーミラーと飼い主が陽の沈みゆく海に現る
 聞こえない光の中の蝉しぐれ音なき蝉を母は見上げる
 風にハグしながら我に近づきしカモメよそのままハグをしようか
 花を挿すように紅茶を入れるひとの無言が沖の舟まで届く

初恋を消去法にて思い出す 美術部なりの絵なども 草々
 その話、何回するのあの女ひとときみのLINEの起承転結
 ダウンタイムのまぶたに夕陽 生き方を間違えた気がします、母さん。
 ほろほろと崩れるくちどけのように死後もきみから愛されたいな
 射す、翳る、地球最後の日を歩く まず野花からほろぶ道のり
 同意書の余白の下のなぐり書き本日も明日も曇天なりき
 ペンダント無くして気づく重さかな想い出なんてそんなもんでしょ
 ストライクバッターアウト 審判の正しい夏の終え方だった

台風セレナーデ

多香子

杏の実黄いろに熟れる夏の日にきみは翼を広げ始める
 台風になる寸前の低気圧 あさつての旅行は行けるのかしら
 台風が大雨連れて通るから、今年の町の夕涼み会中止
 台風は夏の終わりを告げられてひまわり迷路の出口が見える
 秋のげし荒らすが如く手折りては夕ぐれの野に風の音聞く
 鈴掛は風の季節に負けないで腕を伸ばしてリンと鈴振る
 むばたまの闇にガサツと冷蔵庫あれは氷の落ちる音です
 口喧嘩、背を向け寝たるその後は台風一過の麗しき朝

辞めてきた仕事の思い出今夜会うあいつの返事に賭けてみようか

◆ 南の島

不安気にひとり猫背にくつついておやすみと言うぼくの飼い主

◆ 衣末（みみ）

眠れない夜にやさしい歌が聞こえてくるんだよまぼろしのひと

◆ 水也

あの夜は踊っていたと言えはいい シーツのドレスとジャケットを着て

◆ 宮岡りょう

妹もお前も二度と帰らない鴉の夜の濡れている石

◆ 虫武一俊

闇の中時をゆつくりなめしゆく田舎の宿の蘭草の匂い

◆ 六浦筆の助

シーリングライトがつくる闇色が灯されてのち夜は訪う

◆ 六厥めらう

真つ暗な姿で新居現れて灯せば調度見せてくれたり

◆ 村田一広

白光をうけとめきれず目を閉じる いいえ月蝕、これは私の

◆ 森内詩紋

こいびとを帰した夜はしろい波だけがわたしへ訪れている

◆ 杜崎アオ

パトラッシュおらぬ部屋にて疲れたるとも言へずし夜を閉ぢけり

◆ 箭田儀一

初更、二更、三更、四更、月光がみどりに染める夜の外縁

◆ ヨシダジャック

“パンケーキアガヴェシロップバターのせ” しじまに星の涙が墜おちる

◆ れいあむ



テーマ詠 「夜」

君のことあきらめようと決めた夏見上げる星にぼやいたりして
 爪をたて甘ゆるふりをして今夜あなたのうろこ一枚うばふ
 夏を殴り夏になぐられ向日葵ががつくり垂れる九月の闇に
 おれはまだ呑み足りないぞ祝宴の帰路をゆらゆらついてくる月
 夜は秋きみの手にもう汗はなくやがていつかの花火の熱さ
 三歳を夜のくぼみに眠らせてそろりとナイトスクープを見る
 真夜中の雷みたいな味がして最初のビールは衝撃でした
 《夕鶴》の台詞こぼれる校庭の一番星を見上げて帰る
 夏と秋、狭間の夜空に流星雨／これがきみとの適切な距離
 貴方へのところがここから飛んでって貴方を照らす優しい月に
 夜明けには終わる運命の愛だった 月下美人の微かな香り
 台風の前夜に買った鮭メンチこんなすがたになってしまつて
 秋の夜の席を譲つて立つ人が黙読をする離乳食レシピ

◆ 辻堂 瞬
 ◆ ともえ夕夏
 ◆ 中村成志
 ◆ 夏生薫
 ◆ 夏野ネコ
 ◆ 袴田朱夏
 ◆ 薄荷。
 ◆ 笛地静恵
 ◆ 古井 朔
 ◆ 真岡まな
 ◆ まさげ
 ◆ 御糸さち
 ◆ 深影コトハ

ともだち

千原こはぎ

「とりあえず生」で始まる これまでと何も変わらないデートみたいに
 新しい眼鏡だね、それ 買ったことすら知らなくて当然だった
 「最近はずいぶん涼しくなった駅までの夜をゆっくりゆっくり歩
 ずいふんと涼しくなった駅までの夜をゆっくりゆっくり歩
 発車まで見送ることももうなくて目を伏せてゆく別々のホーム
 尾を引いてしまわないようふらふらと寄り道で買うコンビニスイーツ
 真っ白に塗り潰されて何ひとつ残らなかつたきみとの未来
 熱帯夜みたいな日々を繰り返すことのないようともだちでいる

名にしおはば

ともえ夕夏

やはらかき み の付く名前に憧れてインターネットのHN
 渾名すらなく丁寧にさん付けで呼ばれるときの透明な線
 子供にはこんな名前をつけたいわふたりの吾子ほちらもをのこ
 『美紀』といふ名の美しき少女には美しくても病のうはさ
 一度だけこの名の由来を聞く期待した物語ではなかりけり
 『ゆうちゃん』とかつてわたしを呼びしひとは二度結婚し離婚したらし
 病院も郵便局も銀行もたまにわたしの名を間違へる
 妻になり母になりたり名前などなくとも機能する有機体

ペリエの緑

中村成志

信号のすべてが赤を放つなか午後十二時蟬のひと鳴き
 公園の朝の木陰に風があるベンチが乾くまで歌を読む
 食いものの泥より生まれ来る不思議いつせいに穂が風へ抗う
 思い出の品が手元にあるかぎりおもいになつてくれない、だから
 水道の水束が打つ午後二時の汗に疲れたハンドタオルを
 夏を覆う虚無へと並べカティサークの、ハイネケンの、ペリエの緑
 崖っぱいの葛葉がりゅうと裏返り白さを保つ三秒、五秒
 早朝の熊ん蜂が揺するアベリアの白花垣を左へ曲がる

父を送る

夏野ネコ

ラジオよりデスペラードの流れをり喉は父を夏へ閉じ込め
 帰宅せし動かぬひとの白きかお撮りて見もせず削除もできず
 抱き締めていいかわからず頬骨を指でなぞれば日々と日々、日々
 保険より服だったんだあのひとの背広が次から次と出てくる
 シャンとしたひとだったよね、叔母さんの言葉で着せた最期のスーツ
 こんなにも話しかけたことはなかつた返る言葉もないというのに
 もう食えぬ人をば送るサラチキを齧るごめんよ腹が減るんだ
 ああ寝てる寝てるラジオをつけたまま知らんぷりする目覚めないのを



チーズ・オン・不平等

袴田朱夏

経済のふるう国からやってきたミスタードーナツ、ミセスベークル
 カロリーはあれは単位だ スマホならギガが足りないとか言うだろう？
 エルメスのかばんの中のうちまい棒見えていますよチョコレート味
 むかしと違うあつさだからねベージュのつたチーズの勝利宣言
 チーズも割かせてくれるのにさらにさけるチーズが割かせてくれる
 賢明なひとはアルミをはがさずに6Pチーズを4人で分ける
 追いチーズ追いタバスコをかけて焼く冷凍ピザはやさしい地獄
 平等という不平等 あなたならうまく奇数に切り分けられる？

なつのみず

薄荷。

ふるさとの川と同じあお色の靴下をはけば風はかるやか
 ふるさとの川はよかりし思ひ出のひとつひとつに輝く水面
 ゴールつてことになっていた河川敷公園にいるハトは灰色
 海まではあと十五キロ緑色の風が背中をゆっくりと押す
 サンドルを左手で脱ぐ（目の前の海の白さに懂れている）
 夕立は世界を白く切り取つたいじめられっ子の記憶のまま
 貝からは割とおしやべり窓をうつ夕立ちにまで挨拶をする
 この夜をころがり落ちる雨粒をすくってみせてよビッグ・ディッパー

大規模店舗怨歌

笛地静恵

当面の利益を求めガツガツと餌に群がる実力者ども
 駅前にかたい面して出店の大規模テンポ金を集める
 ひとつふたつ弱い店から消えてゆく捨てられるのさ腐ったミカン
 閉店の顔のなじみの本屋さん二言三言ことばを交わし
 駅前のお店街をメチャクチャに壊してついに廃墟にしたよ
 ひとびとのつながりさえもすりつぶしカンパなきまでたたきつぶした
 売れないとわかればすぐに諦めてスタコラサッサトんづらをこき
 中国の巨大資本に潰される大規模店舗いつか来た道

こゝれが愛

福山桃歌

これが愛 胸を張っても届かない手があることの虚しさは無限
 やわらかい心でいたいの指が勝手に綴るちくちくことば
 迫りくるタイムリミット駆け出せない足にたくさん枷をぶら下げ
 あの曲のアウトロだったオルゴールアレンジだったとしても分かるよ
 感情をたやすく殺すスイッチがええ歳こいた大人だからある
 涙なら代わりに流すから青く湿度の低い空になつてよ
 これが愛じゃないとしたらチケットもないシタオルも掲げてないし
 だとしても祈るよきみのためだけにきみが笑顔で帰れるように

- ◆ 街灯も消える時間を過ぎていて深夜を統べる王になれそう
- ◆ 真つ黒な遮光ネットを取り去って明るくなった暴風雨の夜
- ◆ やってくる夜が少しずつ早くなる九月は人を忘れる時間
- ◆ 手のこうに「オレンジ」とペンで書いた子が眠る電車が輪を描く夜
- ◆ 一人きり貴方のいない悲しみと子猫の声で夜は明けてく
- ◆ 再起動するまでそつとしておくね毛布をかける半夜のソファ
- ◆ 眠らない梅田の街で星たちは見えないように僕らを照らす
- ◆ 背徳感ちよつとあるかも寝転んで夜中に食べる最中のアイス
- ◆ あゝこれはきつとあなたの来る夜を待つて開かないハチミツの蓋
- ◆ 血に濡れた少女の心包み込む夜という名の神秘のヴェール
- ◆ こんなにも豊かだったか祖母と聴く虫たち主催演奏会は
- ◆ 夜もすがらおにぎりせんべい噛むだろう五十年後も元氣なふたり
- ◆ 生ぬるい海底みたいな夜をゆくあなたは泳ぐことまで得意
- ◆ 河岸景都
- ◆ 砧
- ◆ 君村類
- ◆ 久野和声
- ◆ 久保田毒虫
- ◆ くらたか湖春
- ◆ 澤田悠生
- ◆ じえうーと
- ◆ 西鏡
- ◆ 白石夜花
- ◆ せいや
- ◆ たえなかず
- ◆ 千原こはぎ

「夜」

テーマ詠

星河より雨そぼ降りて神聖の森にいだかれ夜鷹は眠る

月が知る限りの「きみ」を照らすため地球くまなく夜回りをする

噛み砕くグラスの氷真夜中のファミレスでしか摂れない養分

夜という空間にいて日陰とは時間なのかと眠たい思考

しづかなる蚊取線香ひたひたと渦のかたちに夜を燃やして

まもなく闇、闇ですお出口左側3番のりばに到着します

夜に降る雨を有り難がる我は川中島の小説を読む

三秒で眠りに落ちた君の横夏の星座の図鑑を開く

蜃気楼 夜の噴水に残されしカラスアゲハの標本渴く

眠れない理由を夏のせいにして何も見てないふりをしている

みちみちに満ち溢れてる後悔の重みをもって漂う深夜

光る湍とたゆたふ河を夜空へと見上げる。あれはこほしき常世

遠すぎる空は夜空とおなじで諦めるって容易いことだ

◆ 碧乃そう

◆ 青野佑季

◆ 麻数

◆ 麻倉ゆえ

◆ 有村桔梗

◆ 井倉りつ

◆ 石川順一

◆ 宇井モナミ

◆ 宇祖田都子

◆ 泳二

◆ h_s

◆ 歌島孟

◆ 漣井戸

傘をもたずに

古井 朔

ドライブラ

御糸さち

やっぱりね気がするだけで朝が来てなんとなく始まる同じ一日
また今日も天気予報は必ずハズレいつもどしやぶり誰かの空は
いつのまに扇風機が首を振りわたし以外を冷やしはじめ
きみもない日々になれてきた頃に傘をもたずにひとり歩いて
ボクたちはそれぞれ正しき言い訳に互いを許せず充たされぬまま
あの日みた花火の色はせつなくて西瓜に塩はなくても平気
果てしないクロールの先、立ちのぼる 忘れずにいつづけるのは罪ですか
雨上がり琥珀色のしずく零れ落つあなたはわたしの心星でした

リトルボーイ

まさけ

キンギョソウの咲く庭に

深影コトハ

蟻の巣を無邪気に潰す少年もある意味それと同じに見えて
諷めつつ観てる未来の戦争の新作アニメ それは楽しく
八月の夜中に密か降る雨はオッペンハイマーの涙と思う
蹂躞をされて倒れたデイジーにたらふく水をかける真夏日
「平和つてなあに」と問われ息を呑みミサイルが飛ぶニュースを消した
黙祷の真似をしている少年に少し教えた戦争のこと
また花を咲かせるように願いつつ今朝は二人で水を与えた
放たれた鳩が減ったと報じられ平和の意志を継ぐ難しさ

どんな蝶だったのでしよう蜘蛛の巣に呼び鈴のように揺れる片羽
草を刈る左手にまだ自分でも見慣れぬ銀の指輪がひかる
春に咲くキンギョソウなんて植えてみる初めての冬を迎える庭に
奥さんと呼ばれて少しくすくすくたい日当たりのよい窓辺で暮らす
電話越しのあなたの嘘に気がついて夕焼けにあぶられてゆく家
ネクタイを解けばすぐにバクバクと金魚のようにアライを吐く
ねえこれで二度目ね 証拠を突き付けて始まるあなたのアナフィラキシー
かわいらしい奥さんになるねキンギョソウ枯れたあとまで抱き続けてね

レベル 32

南の島

頼れども責任持てとも言われつつ持つ持たないを決める年頃
 いいねって思われたいけどほっといてほしい押さえるトレンドとごきげん
 ソファー席研修生と連絡が取れんと笑う背広が二つ
 積み上げたものが形になってきたぶつ壊してと歌ってた友
 また一人優しい人がいなくなる四十の主任の独立祝う
 大人しく大人の愚痴を言い合ってウチら大人になっちゃったよね
 #MeTooと声あげる人黙る人みんなの中のひとりの話
 大丈夫逃げて同じ広い世界みんなであつた宇宙にひとり

可能性の花

水也

なんだってなれるぼくらは空の子で飛ぶ鳥を追う夢をみている
 あなたへの言葉にできぬ思いから生まれた花よ虹色に咲く
 いつだって先ゆくひとだ伸ばす腕みじかくて、みじかくていとしい
 背を追っているの永遠シンデレラ靴は砕いて駆けてゆくから
 あこがれを胸に高く飛び上がるよまひるの月よどうか待ってて
 ならびたつことを望んでいるわけじゃないの、わたしは尊敬を抱く
 ぴんとする頭の天辺から足先まで凜と きみになりたい
 あざやかにするための白、可能性未だ蓄であるのは君も

夏の終はりに

村田一広

客もなき電車一両音もなくローカル線の霧深くより
 夏限定のスイカスイツ海岸で夏限定の友といたたく
 バスタオルから湯気が出てゐる夕立のシャワー全身に浴びせられ
 撫でてゐたのは水面で庭の池の気持ちやうやく落ちて着いたころ
 夕立の名残りが地面叩いてる太陽が待ち切れず顔出す
 一口で飲むよりハンカチを染めて手元に置いておく赤ワイン
 誤解とくやうに優しくほぐしゆくコンビニの冷やし中華の固まり
 路地裏に逃げ込めるうちはまだいい猫がなぐさめてくれたりもする

ニガクテアマイ

森内詩紋

狼狽える顔は見られなくて眼鏡をなおす振りして笑う
 いや、だってわざわざ口に出せない？ワンピースむっちゃ似合いますね、は
 なんてことないような話してるだけなのにじんわり肩がほぐれて
 丁寧な作業するのだから気を抜けばあなたはきつとすぐにわかるし
 あとコーヒー一杯分はこのままで、そしたらやはり帰らなくちゃね
 安心は儂いものだ、たとえば無添加シフォンケーキのように
 未来への約束が決してないとしてそれと恋とは別問題で
 抱えこむほろ苦さ確認すべくレタスの外葉むしりとり食む

ひかり

六浦筆の助

内側のかさぶた蒼くひかつては瞳吸い取る曜変茶碗
 閃光をお告げとし受く花火の日、巡礼衣装の浴衣も闇に
 夏の夜はくすぐつたいね、緑日の裸電球ぼんやり差して
 ノックするジリリ・ドンヨリ・ピカゴロをステンドグラスが迎えて、ドラマ
 スクリーンに映る役者の広い闇ぐつと焼き付く電影でした
 曇天の日に夕焼けを食べたくてひかりに透かす釜玉うどん
 日光に負けてひかりを閉じてゆきうとうとしそう古いスマホが
 「このままで突っ走ります」推敲の迷い断ち切るコピーのひかり

たまには会おうよ

六厥めれう

細長い空き地が延々つづくからそこが軌道であったと分かる
 史上初、史上初って繰り返す暑さを語る語彙の少なさ
 結局は褒めるんかいな居酒屋のお通しみたいな嫌味のあとで
 朝・晩と朝・昼・晩の処方だと昼を忘れる才能がある
 家でならブラックで飲むコーヒーに保険のようにミルクをもらう
 それぞれのスティックシュガーが秘めている水平線が一致している
 謹呈箋しおりのように挟まれてしおりとしての役目を果たす
 エレベーター錘が去ってゆくとときに近づいてくるゴンドラがある

フルーツフルーツ

ヨシダジャック

夏の宵、エンデの『モモ』を読むとききみの美しい舌
 降参は受け入れられず鬼灯の五角形のあやし、あやし
 疲れ果て起こせぬバイク蹴ってみようかいっそ桃を食べてみようか
 Dury, hurry イチゴが3個残された畑を知っているのよわたし
 夏は朝から。一日じゅう本を読んで桃を食べて暮らすの
 たぶんこれから突き落とされる湖水には柘榴の花が浮かんでいます
 バナマンのびちびちの服はるけて街は名前を知らぬ祭日
 焼きあがる魔女のケーキ黒い森でいいサクランボだけを集めて

壺中天ゴルフ

れいあむ

夏あらし土砂降りの雨のそのあとに秋の来ないを扇風機と待つ
 ひたすらに踏みしめる砂の響きして白磁の壺でゴルフする祖父
 南瓜色したトロツコで登る坂、またね、と手をふる烏潜がましきよ
 垂るる氷と飲む珈琲のただ滲む玉屑などは言の葉すら死
 振り返り振りかえりして背ばかり向日葵の子の「鬼さん、こちらー」
 エアコンに餓えてはふと水さぐる目の下にクマでも微笑うぼく
 むしむしとのたうつ影に我ひとり夕星を射る時がちぎれる
 フロストの蛙のような夜の露なんだかチルい君ん家泊めてよ